

創始者たちのスヌーズレン思想に関する一考察

—最初の著書 ”Snoezelen , another world” を分析対象に—

姉崎 弘
(常葉大学教育学部)

要旨

本稿では、創始者たちによる世界最初のスヌーズレンの著書 ”Snoezelen , another world” の翻訳書『重度知的障がい者のこちよい時間と空間を創るスヌーズレンの世界』(2015年、福村出版刊行)を基に、スヌーズレン思想について考察した。創始者たちの思想は、今日の重度知的障がい児者の福祉・教育・リハビリテーション等において介助者や指導者に必要とされる基礎知識や基本姿勢を述べていた。またこれまでの日本スヌーズレン協会の功績は評価されるが、創始者としてアド・フェアフル一人のみを紹介し、共同創始者のヤン・フルセッヘが忘れられていたこと、さらにわが国でこれまで「スヌーズレンは治療法でも、教育法でもありません」と広く啓発してきたが、この点に関しては創始者たちの「セラピーや教育にも自由に利用できる」との基本的な考え方とは異なること、が明らかになった。今後、他の論文資料等も用いた検討が必要である。

見出し語：重度知的障がい者、スヌーズレン思想、リラクゼーション、教育、セラピー

I. はじめに

筆者は 2015 年 7 月に、スヌーズレンの創始者であるヤン・フルセッヘ(以下、ヤン)とアド・フェアフル(以下、アド)が著した世界最初のスヌーズレンの著書 ”Snoezelen , another world”(共著)を、監訳者として翻訳し出版した。本書の題名はその内容を読者にわかりやすく伝えたいとの願いから『重度知的障がい者のこちよい時間と空間を創るスヌーズレンの世界』¹⁾(以下、『スヌーズレンの世界』)とした。筆者は、これまでハルテンベルグセンターの 2 回の訪問や国際スヌーズレンシンポジウムで、著者のヤンとアドに何度かお会いしており、お二人の温厚で優しい誠実な人柄に深い感銘を受けた一人である。

これまで、創始者たちのスヌーズレンの理念や思想については、いくつかの文献で紹介されてきた。たとえば、鈴木(1997)は、スヌーズレンの理念について「(1)重い障害を持つ人々に視覚、聴覚、嗅覚、触覚など各種の刺激を用意し、それを楽しめる環境を提供することで、障害を持つ人々が自分自身の時間を自分自身の選択で活動できるようにする。(2)知的障害を持った人と共にする活動において、介護者側は治療効果や発達促進を一方的に求めるのではなく、知的障害を持つ人の反応をありのままに受け入れ、共に刺激を受け入れ、楽しむ、ことにあります。」²⁾と述べ、わが国に理解啓発を図ってきている。

上述の理念の(1)は重要である。しかし、(2)の前半部分は創始者たちが直接文章で綴った

言葉なのだろうか。あるいは、創始者たちの考えを忠実に表わした言葉なのだろうか、との疑問をもつ。その理由は、「介助者側は治療効果や発達促進を一方向的に求めるものではない」といった、スヌーズレンは治療や発達とは異なるとの明確な主張が見られるためである。これまで“*Snoezelen, another world*”が日本語に全文翻訳されてこなかったことから、本書に記載された創始者たちの思想が一部誤って理解され、その結果私たちにその思想が正しく伝えられてこなかったのではないかと懸念される。この点は本書を基に検証する必要がある。

そこで本稿では、『スヌーズレンの世界』に表われた創始者たちのスヌーズレンの思想を、創始者たちが直接綴った文章をもとに考察し検証したいと考える。思想を考察する前に、まず筆者がアドからメールで収集した資料を基に、創始者たちの経歴から述べることにしたい。

II. 創始者たちの経歴の概略について

わが国では、これまで創始者たちの経歴についてはほとんど明らかにされてこなかった。1999年に設立された日本スヌーズレン協会のわが国へのスヌーズレンの理解啓発と普及の功績は認めるが、今日でもホームページには、「創始者はアド・フェルフルさんです。」³⁾と紹介されている。このことから、これまでスヌーズレンの創始者として、アド・フェルフルの名前のみが紹介され、ヤン・フルヘッセの存在が知られることはほとんどなかったのである。しかし『スヌーズレンの世界』の「日本語版の序文」の最後に、著者代表のアドは自らを「スヌーズレン共同創始者」と呼んでいる。すなわち、スヌーズレンの創始者はアドだけではなく、もう一人、ヤンがいることを私たちは銘記する必要がある。本書の第一著者はヤンであり、第二著者はアドである。したがって、ヤンが中心になって本書を執筆したと理解される。このことに関して、私たちは正しい認識を持つ必要がある。ヤンは、筆者が参加した2006年の第6回国際スヌーズレンシンポジウム(ドイツ大会)の際に、体調を理由に今年限りで現役を引退することを表明した。これまで、アドは国際大会での司会やメインレクチャーを担当することが多かったのに比べて、ヤンはアドより15歳も高齢であり、国際的な舞台などではどちらかと言えば、アドに比べてあまり目立った存在ではなかった。こうしたことが私たちがヤンの存在を軽んじた要因の一つではないかと考えられる。

『スヌーズレンの世界』(2015年)の最後に、この本の「著者略歴」⁴⁾が掲載されている。これは筆者が本書の出版に際して、特にアドにメールで依頼して送付してもらった「著者略歴」を筆者が重複している内容を省き、日本語に翻訳したものである。このメールによると、

ヤンは、1935年生まれ。教育科学を学び、小学校で16年間勤務し不応児の教育経験や管理職の経験をもつ。また音楽療法士でもある。1974年からハルテンベルグセンターにきて、32年間勤務した。職業指導部長を歴任し、いくつかの教育プロジェクトを立ち上げている。1974年に、同僚と共に、「初歩の活動」(後の「スヌーズレン」)と呼ぶ重度知的障がい者に対するある特別なレクリエーション活動を開始し発展させた。そして1977年に、アドと共に、スヌーズレンの考えを初めて導入した。1979年に常設のスヌーズレンルームを建設する計画を立て、1983年に完成している。ヤンはポーランドにスヌーズレンルームを建てることに尽力し、特にヤン夫妻はスヌーズレンのパイオニアと呼ばれている。

一方アドは、1950 年生まれ。はじめに農業と林業を学び、オランダ軍の兵役にも従事している。そこでデザインと服飾芸術を学ぶ。その後 7 年間、芸術高校で芸術セラピーと芸術教育を学び、芸術教育分野の修士号を取得している。1973 年からハルテンベルグセンターにきて、今年で 42 年目になる。ここで作業療法部門の療法的スーパーバイザーの一人としてスタートしている。1977 年に、ヤンと共に、スヌーズレンの考えを初めて導入した。1979 年から幅広いレクリエーション活動を開始し発展させた。オランダ政府から全面的な支援を受けた大きな特別なプロジェクトを立ち上げる。1980 年から Snoezelen Worldwide の会議の主なスポークスマンを担当し、1983 年からハルテンベルグセンターの日中活動の部長として活動した。2002 年に、フンボルト大学で、Prof. Dr. Krista Mertens と共に ISNA(国際スヌーズレン協会)を共同で設立し、8 年間共同代表を務める。現在、ハルテンベルグセンターの上級経営アドバイザーとして、また ISNA-MSE の International Board の一人として活躍している。

ヤンとアドは、1974 年に、「初歩の活動」と呼ばれる、「後のスヌーズレン活動」を一緒に開始し発展させていった⁹⁾といわれる。ほぼ同時期に、ハーレンドール入所施設でも同じような活動が行われていたが、数年後理由は定かではないが、この活動は中止された⁹⁾といわれる。ハルテンベルグセンターでは、ヤンのもつ教育科学の知識や障がい児の教育経験、音楽療法士としての専門性と、アドのもつデザインや芸術セラピー・芸術教育の専門性を十分に生かし、二人が協同して重度知的障がい者に対する特別なレクリエーション活動をさらに発展させて、スヌーズレンのオリジナルな考え方や実践を生み出していったものと考えられる。特に、最初の頃、アドはヤンに比べて障がい児者の指導経験がほとんどなかったことから、障がい児教育の豊かな経験をもつヤンから教を乞うことが多かったのではないかと推測される。その意味で、ヤンがアドをリードしながら、スヌーズレンの理念や実践を深めていったことは想像に難くないと考えられる。

Ⅲ. 創始者たちのスヌーズレン思想について

次に、筆者は『スヌーズレンの世界』にみる創始者たちの考える「スヌーズレン思想」の基本となる柱として、以下の 6 点を取り上げる。ここでは、以下これらについて考察する。

1. 「最も重要なことは人と人との触れ合いである」
2. 「スヌーズレンは人間の環境を最適化する経験の一つである」
3. 「私たちは、刺激を選択し、削減することで、知的障がいのある人の世界から混沌と脅威を少なくすることを目指している。スヌーズレンは、第一にある種のリラクゼーションである、と私たちは考えたい」
4. 「彼らのコミュニケーションレベルに「降りる」ことで、私たちは彼らととても親しくなる」
5. 「定期的な評価は、スヌーズレンのさらなる発展の実現のために不可欠である」
6. 「スヌーズレンは、知的障がい者の発達、感覚の活性化、さらにセラピーにも使用できる。スヌーズレンの利用法は自由である。」

1. 「最も重要なことは人と人との触れ合いである」

「私たちは重度知的障がいのある人々の「受身的世界」、一日中ベッドで横たわっている以外ほとんど何事も起きない世界を見て、気付かされた。このような人々の「生活」エリアは、非常に重い障がいのある人々すべてにとって、まったく刺激がない病院のような環境でした。私たちは、この受身の世界をもっと面白くする簡単な解決策を探すことからスタートした。こうして、重度の知的障がいのある人々のために初めてのスヌーズレンが考え出された⁷⁾。」

「最も重要なことは、人と人との触れ合いである。これは決して機械とか特殊効果で代用できるものではない。そしてこれは、いつまでも、私たちがスヌーズレンの感覚を重度知的障がい者と分かち合うことができる出発点でなければならない⁸⁾。」「特に触覚に関する限り、重度知的障がいのある人々は触覚を通して、より「深い」認知を得ている。彼は触覚によって非常に熱心にもっとも満足のいくスヌーズレンを経験するという事実を私たちは知っている⁹⁾。」「彼らは大抵、世界を快・不快で体験している。(中略) 私たちは他のどんな人の世界とも同様に、彼らの世界を尊重しなければならない¹⁰⁾。」「自分1人で「スヌーズレンをしている」のではなく、介護福祉士と一緒にいると利用者を感じさせたい。(中略) 利用者があなたを「スヌーズレンの」仲間と感ずるようにすることである。まず第一に、あなたの存在を身体的に感じさせることである¹¹⁾。」

重度知的障がい者は、ものを触る、匂いを嗅ぐ、食べ物を味わう、ものを見る、音を聞くといった五感を用いた「感覚による経験の世界」で生活していて、快・不快を経験しているが、彼らはその経験を言葉で十分に説明できない場合がほとんどである。そこで彼らが自分自身の感じた世界を周りの人たちと分かち合うためには、言葉によるコミュニケーションに代わる、彼らの得意とする触覚を使った人と人との触れ合いが特に重要になると考えられる。

スヌーズレンは、一見してルームや器材といった環境の設定が目にとまりやすいが、創始者たちは、そうした環境の中でも特別な器材によらず、彼らが介助者との身体的な接触を通じて「人と人との触れ合い」を最も重視していたことは見逃しやすい視点である。スヌーズレンを通して感じた感覚の世界の経験を、彼らが自分の傍にいる介助者と分かち合うこと、すなわち、介助者が彼らの気持ちを知り共感し合うことが、彼らへの介助や支援の基礎であり出発点でなければならないとの考え方である。何よりも、彼らが私たちと一緒にスヌーズレンをしていること、そこから私たちをスヌーズレンの仲間であると感じさせることを重視している。

2. 「スヌーズレンは人間の環境を最適化する経験の一つである」

「私たちは外界を普段あまりにも理屈っぽく見すぎるので、自らの五感をあらゆる面で十分に活用してはいないということに気が付く¹²⁾。」「私たちは、ある用具にはたった1つの機能、つまり本来意図して設計された機能しかないという考えにあまりにも長い間慣らされてきたのかもしれない。たとえば、トランポリンといえば、飛び乗るものである。まず行動が先にあつて、利用者は自発的に参加する。では、このトランポリンを別な方法で使ってみよ

う。用具としてのトランポリンの影は薄れることになる。その同じトランポリンに、入所者がそつと寝転んでみると、その人は「揺れ」を感じ、その感覚を好むか嫌うかのどちらかになる。(中略)ここでは、体を支えるという機能を与えられたのである。これはより受身的な使用法と思われるかもしれないが、その感覚は、トランポリンを本来の目的で使用した時よりも、より深く感じられるかもしれない。しかし、いずれにしても、新しい種 of 感覚である¹³⁾。「スヌーズレンは、人間の環境を最適化する経験の1つである¹⁴⁾。」

私たちは、視覚などの特定の感覚を主に使って外界を捉え理解していることが多いため、自分のもつ五感を十分に活用していない。そのため自分のまわりにある環境を無意識のうちに偏って捉えていることがある。自分のまわりにある空間の刺激に気づいて素直に喜ぶように、さまざまな感覚をバランスよく活用することが重要であると指摘している。スヌーズレンの創出する心地よい多重感覚環境は、私たちが普段使用していないさまざまな感覚を呼び覚まし、体全体に新たな感覚経験の機会を与えてくれる。それは私たちにとって新たな発見でもある。スヌーズレンは、私たちにほど良く調整されたさまざまな感覚刺激を体全体で感じることから、私たちの周りの環境を最適にしてくれる経験の1つであると考えられる。

3. 「私たちは、刺激を選択し、削減することで、知的障がいのある人の世界から混沌と脅威を少なくすることを目指している。スヌーズレンは第一に、ある種のリラクゼーションである、と私たちは考えたい」

「私たちは、刺激を選択し、削減することで、知的障がいのある人の世界から混沌と脅威を少なくすることを目指している。彼の世界はしばしば非常に緊張している。そして、私たちはそれをよりリラックスしたものにしようとする¹⁵⁾。」「彼らは大抵、世界を快・不快で体験している。それは、重度知的障がい者が物に異なる意味を与え、物の使い方から経験を自分のやり方で解釈するという、混沌とした世界の中での生活を意味する¹⁶⁾。」

「毎日の実践の中で、私たちはいかに入所者が1つの活動から他の活動に「急かされているか」を見ている。(中略)入所者にとってそのペースが速すぎる場合が多い。これは、たとえば、職員の人員不足が原因といえるスヌーズレンでは、できる限りこの性急さを払いのけたい。利用者は刺激を受け止め、それを認知し、自分自身のペースで体験するための時間を与えられなければならない¹⁷⁾。」「利用者のペースの尊重は彼らの能力を最大限に働かせるための必須条件だからである¹⁸⁾。」「そのねらいは、利用者自身の選択およびペースを考慮した魅力的な環境で主要な刺激の選択肢を提供するということにある¹⁹⁾。」

「入所者がスヌーズレンをしている時、大切なことの1つは彼が安心していることである。そして、これはまた介護福祉士にも当てはまる²⁰⁾。」「心地良い家具は、ここでは必需品である²¹⁾。」「スヌーズレンは第一に、ある種のリラクゼーションである、と私たちは考えたい。それは、文字どおりのレクリエーション(レジャー)ではなく、安らぎを与える活動である²²⁾。」

創始者たちは、重度知的障がい者が、この世界でどのような状況に置かれているのかを的確に理解して、彼らをより良く支援するためにどのような配慮が必要なのかを考察している。彼らはいつも次の活動に急かされているという。ルームの中で、彼らの好む刺激を自己選択

させ、彼らを脅かす刺激を排除し、彼らのペースで刺激や環境を楽しむことで、安心して過ごすことのできる生活を保障する取組みは、知的障がい者の教育や療育の基本であると考えられる。彼らがスヌーズレンを通じて、リラクゼーションに導かれること、すなわち、何よりも安らぎの時間と空間をもつことで、彼らは自らを混沌と脅威から守り、「安心できる生活」を送ることが可能になる。こうしてさまざまな楽しさや喜びを味わうことができるようになることで、彼らの持っている能力が最大限に引き出されていくものと考えられる。

4. 「彼らのコミュニケーションレベルに「降りる」ことで、私たちは彼らととても親しくなる」

「言葉によるコミュニケーションがほとんど、もしくは、まったく不可能なことによる不満や無気力になった結果、1つの活動としてスヌーズレンが生まれたのである。問題は、たとえば、他の人の身体を撫でたり、触ったりするような、他の表現方法を見つけないといけないということである²³⁾。」「知的障がいのある人のレベルでコミュニケーションすることは、折に触れて抱きしめたり、彼らと同じように、一緒に横になったり、座ったりすることである。(中略) 私たちはもはや利用者の指南役(ガイド)ではなく、完全に彼との活動に参加する、平等なパートナーである²⁴⁾。」「スヌーズレンでは、私たちが彼に適應することが要求されている²⁵⁾。」「スヌーズレンに関する限り、私たち自身の「通常の」経験で判断して、あまり干渉したり、正したりするべきではない、ということである²⁶⁾。」「彼らのコミュニケーションレベルに「降りる」ことで、私たちは彼らととても親しくなる²⁷⁾」

重度知的障がい者が「安心」して過ごすためには、周りの人たちとの触れ合いが大切である。特に「触覚」の働きを活用して外界の理解を深めている彼らには、「強い抱擁」が必要であり有効である。また介助者が彼らに上から目線で一方的に指示したり、行動を規制したりするのではなく、彼らの良き仲間(パートナー)として親しくなる必要がある。そのためには、抱擁の他に、彼らの傍で彼らと一緒に横になったり、座ったりすることが大切である。このように彼らのレベルに降りて、彼らと同じように行動し、同じように感じるように努める必要がある。このことは、障がい児者を担当する介助者や教師の基本姿勢であるといえる。

5. 「定期的な評価は、スヌーズレンのさらなる発展の実現のために不可欠である」

「スヌーズレンは、私たち自身も完全に参加する活動であるため、そのような状況での私たちの観察はかなり主観的なものになる。私たちは、全体の雰囲気によっても強く影響されている。そしてそのことは、利用者と環境設定の客観的な観察を難しくする²⁸⁾。」「このデータの定期的な評価は、スヌーズレンのさらなる発展の実現のために不可欠である。特に注意をするポイントは何か? 利用者がスヌーズレンルームの特定の部分が気に入っているのかどうかを見つけ出してほしい。何回、スヌーズレンルームに来るのか²⁹⁾。」「またスヌーズレンを合理的に分析しようとする、その独特の「ぬくもり」を無視する危険を冒すことになり、ほとんど恩恵を受けられないだろう。スヌーズレンを厳格に分析すると、「意識的に接する」意味が失われ、単なる趣味になってしまう³⁰⁾。」

創始者たちは、スヌーズレンの場面における観察と評価の重要性を指摘している。スヌーズレンでは、私たちも重度知的障がい者と共にその中に一緒に参加するため、私たちの観察は主観的なものになる。このことは、客観的な観察を難しくするといえる。観察に際しては、普段と比較して、スヌーズレンでは彼ほどの場所を気に入っているのか？あるいは何回スヌーズレンルームに来ているのか？といった観察の観点をいくつか具体的にあげている。

わが国では、以前から、「スヌーズレンの効果の評価することは困難³¹⁾」と言われてきた。しかし創始者たちは、定期的な評価は、スヌーズレンのさらなる発展のために不可欠であることを指摘している。リラクゼーションを図るためにスヌーズレンを行う場合でも、介助者は利用者の観察と評価が必要である。観察を通して利用者の好みや嫌いな物を特定することが可能になる。また評価することで、スヌーズレン環境や介助者の関わり方の改善点を見出すことができる。しかし介助者は、利用者と共に一緒に活動を行い、その場を利用者と一緒に楽しんでいるため、介助者自身による観察と評価は、きわめて主観的なものになりやすい。そこで、この主観的な評価と併せて、第三者による客観的な評価も併用する必要がある。その方法として、例えば、スヌーズレンセッションの場面をビデオに録画して、後で評価者と一緒に画面を再生・視聴して評価し合い、改善点を述べ合うといった方法が考えられる。複数の目で評価を行うことは、介助者一人による主観的で独善的な評価に陥る危険性を回避する上でも極めて重要である。

私たちは、行動を評価する際、一般に合理的な分析方法を用いる。それは実践前後の対象者の外に表われた行動変容の結果を相互に比較することでなされる。またその変容の仕方を数量化することも可能である。しかし創始者たちが指摘しているように、このような合理的な分析方法を用いても介助者と利用者間の独特な「ぬくもり」は評価が難しいという。それは介助者と利用者との間の「心で感じた世界」であるため、行動の変容としては、外に表われにくいいため評価が困難になると考えられる。この点は、介助者の内省報告(自分の心の中で感じた気持ちをエピソード記録に残す)も加味して総合的に評価する以外にはないのではないかと考えられる。従って評価に関しては、介助者による主観的な内省報告と併せて、他の評価者も参加した客観的なビデオ評価法を併用する方法等が有効ではないかと考えられる。

6. 「スヌーズレンは、知的障がい者の発達、感覚の活性化、さらに、必要ならば、セラピーにも使用できる。(中略) スヌーズレンの利用法は自由である。」

「たとえ、スヌーズレンが教育的な現象だとしても…³²⁾」「私たちは、感覚の活性化とリラクゼーションのバランスを取ることを目的にしている。このような状況での経験は、おそらく、さらなる発達を促すだろう。スヌーズレンの中で、治療状況は必要とされ、創造的になり得る。(中略) 自傷や破壊行動に陥ることが少なくなる。しかし、繰り返しになるが、私たちは知的障がい者の発達と治療をスヌーズレンの中心的な機能にしたいわけではない³³⁾。」

「スヌーズレンは、知的障がい者の発達、感覚の活性化、さらに、必要ならば、セラピーにも使用できる。本書では、私たちの哲学に従って、スヌーズレンの目的をあえて事前に述べないことにする。スヌーズレンの利用法は自由である³⁴⁾。」「プログラムを適用することの

成否については、さまざまな意見がある。しかし、利用者各自が自由に選択することが基本である³⁵⁾。「何がスヌーズレンであり、何がスヌーズレンではないのか、その定義を質問されることが多い。(中略) 私たちはスヌーズレンを明確に規定せず、自由に適用したいと考えている³⁶⁾。」

上述のとおり、創始者たちは、スヌーズレンがまずリラクゼーション(安らぎの活動)であることを強調しているが、他方では、発達や治療としても活用できることを十分に理解していたと考えられる。すなわち、スヌーズレンが教育やセラピーとしても利用できることを十分に知っていたのである。スヌーズレンが発達を促す教育的側面をもつこと、さらに自傷や破壊行動に陥ることが少なくなるというセラピー的側面を併せ持つことも認識していた。このことは、上述したヤンとアドの経歴からもわかるように、二人はそれぞれ教育とセラピーの専門家であったことから、このことを十分に理解していたと推察される。

しかし創始者たちは発達と治療をスヌーズレンの中心的な機能としたいわけではない。ここに、スヌーズレンのオリジナリティがあると考えられる。このことは、発達と治療のためのスヌーズレン・プログラムの必要性について言及していないことから明らかである。その一方で、スヌーズレンの利用法は自由であり、利用者がそれを自由に選択できる、としている。そしてスヌーズレンの概念を明確に規定せず、自由に適用したい、と考えている。

これまで、わが国では、1990年代前半におけるスヌーズレンの導入当初より以下のような見解がみられる。鈴木(1993)は、「スヌーズレンの主眼は発達ではなく、楽しむことである³⁷⁾」と述べ、また「スヌーズレンは、援助者が設定した目標に向かって効果を求めるために行う治療法や教育法とは異なる³⁸⁾」ことを指摘している(鈴木、2002)。さらに鈴木(2007)は、「スヌーズレンは福祉的な視点から出発しており、支援者が一方的にプログラムを立て、特定の効果を求めるたぐいの治療法や教育法とは一線を画する⁴⁰⁾」とも述べている。

他方では、次のような見解もみられる。姉崎(2013a)は「スヌーズレンは対象者のニーズにより、余暇活動として、あるいは障害などの改善や回復・克服を目指すセラピーとして、さらに、子どもの心身の発達を促し支援する教育として、さまざまな利用の仕方があると理解できる」⁴¹⁾ことを指摘している。また姉崎(2013b)は、「対象者として障害児や病人がいた場合には、そのそばに寄り添う教師やセラピストが、対象児のもつ教育ニーズや治療ニーズに応じて、障害児の発達を促す教育や病人の病気を治療するセラピーとしてのスヌーズレンを行うことができる⁴²⁾」とも述べている。このようにわが国では以前から見解が分かれている。

今日、ISNA-MSE(国際スヌーズレン協会)(2012)は、スヌーズレンの定義の中で以下のように述べている。「共感に基づく手法であるスヌーズレンは、レジャー、セラピー、教育などの分野に適用されており、(中略) あらゆる人々が楽しめる空間で実践されています⁴³⁾。」

わが国でスヌーズレンが初めて導入された1990年代は、スヌーズレンが「治療」や「教育」としても活用することができるという可能性は、何故か一方的に否定されてしまい、まったく認められなかった。そしてとりわけリラックスして楽しむことのみが強調された。しかしその後、セラピーや教育としての利用の仕方があることが指摘され(姉崎、2013a)、今日

世界における認識も、スヌーズレンはレジャーやセラピーや教育に適用されているといわれている。筆者の最近の調査で、今日創始者たちも世界の諸研究の成果を認め、スヌーズレンの概念に、レクリエーション(レジャー)と教育とセラピーを含むことができるとしている⁴⁾。

今日でも、日本スヌーズレン協会は、ホームページ上で「スヌーズレンは治療法でも、教育法でもありません」³⁾と明言している。しかし上述のとおり『スヌーズレンの世界』において、創始者たちはスヌーズレンについて、このように一方的に決め付けるような言葉は一言も述べていないことは明らかである。したがって、わが国では、当初よりスヌーズレンの理念²⁾が強調されたが、その理念の一部が独自に解釈されたため、スヌーズレンの「治療」や「教育」としての活用は否定されることになり、その結果「スヌーズレンは教育やセラピーにも自由に利用できる」とした創始者たちの卓見が、正しく認識されないまま今日に至っていると考えられる。今後、スヌーズレンの概念や理念に関しては、創始者たちの著した『スヌーズレンの世界』などの基本文献をもとに再度検討し直す必要があると考えられる。

IV. おわりに

本稿で述べてきた創始者たちのスヌーズレンの思想は、今日の知的障がい児者の福祉や教育、リハビリテーションに従事する職員が、まず始めに知っておかなければならない基礎知識や基本姿勢といえる。今日でもこの分野の発展に十分示唆を与える内容が多々あることから、今後も創始者たちのスヌーズレン思想に考察を加えることは意義があると考えられる。

最後に、今後の課題として以下があげられる。わが国では、これまで日本スヌーズレン協会が「スヌーズレンの理念」を中心に理解啓発や普及活動を行ってきた功績は評価されるが、上述したように、創始者としてアド一人の名前しか紹介していなかったり、特にスヌーズレンの理念やその利用法の捉え方については、一部、創始者の考えとは必ずしも一致しない、独自の考え方を公表していたことが明らかとなった。これらの点に関しては、今後再検討を行い、正しい認識をもつ必要がある。第二に、今後創始者たち本人や関係者への聞き取り調査を実施してさらに詳細な情報を収集し検討することで、創始者たちのスヌーズレン実践の深化と併せてスヌーズレンの思想形成過程を明らかにする必要がある。第三に、今回は創始者たちの著した主要著書一冊のみを分析対象として思想の検討を行ったため、分析資料が少なく必ずしも十分とはいえない。今後その他の論文等の資料も広く収集して、分析・検討を加える必要がある。

引用・参考文献および引用サイト

- 1) Hulsegge, Y. & Verheul, A. (1987) *Snoezelen, another world*. 姉崎 弘(監訳) 重度知的障がい者のこころよい時間と空間を創るスヌーズレンの世界. 福村出版. (以下、I.と略す)
- 2) 鈴木清子(1997) 重症心身障害児者と共にくつろぎ、楽しむ活動 スヌーズレン その理念と実際. 両親の集い, 493, 10-14.
- 3) 日本スヌーズレン協会ホームページ <http://snoezelen.jp/snoezelen.html> (2015年8月)

20 日参照)

- 4) I. 226-228.
- 5) I. 3, 23
- 6) I. 23-24
- 7) I. 3
- 8) I. 23
- 9) I. 42
- 10) I. 26
- 11) I. 56-57
- 12) I. 19
- 13) I. 20-21
- 14) I. 45
- 15) I. 144
- 16) I. 26
- 17) I. 53
- 18) I. 54
- 19) I. 62
- 20) I. 57
- 21) I. 91
- 22) I. 163-164
- 23) I. 43
- 24) I. 154
- 25) I. 159
- 26) I. 56-57
- 27) I. 154
- 28) I. 149
- 29) I. 150
- 30) I. 166
- 31) 鈴木清子(2001) 知的障害のある人自身の活動—スヌーズレン—. 日本スヌーズレン協会,1-15.
- 32) I. 162
- 33) I. 164
- 34) I. 164
- 35) I. 165
- 36) I. 165
- 37) 鈴木清子(1993) “スヌーズレン”—重度知的障害を持つ人々の活動—. OT ジャーナル,1256-1259.

- 38) 山中裕子・鈴木清子他(1996) 「最重度の知的障害を持つ人々への取り組み—ヨーロッパでのスノーズレンの紹介を通して」. 日本特殊教育学会第34回大会発表論文集, J-17.
- 39) 鈴木清子(2002) 最重度の知的障害を持つ人たちの主体的な活動—スノーズレンの余暇活動としての可能性. 作業療法,21(特別号),83.
- 40) 鈴木清子(2007) 感覚刺激による心のケア—スノーズレン—. 月刊実践障害児教育,406,22-25.
- 41) 姉崎 弘(2013a) わが国におけるスノーズレン教育の導入の意義と展開. 特殊教育学研究,51(4),369-379.
- 42) 姉崎 弘(2013b) スノーズレンの基本概念と専門資格の必要性について. 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要,33,57-60.
- 43) スノーズレンの定義 ISNA-MSE ホームページ
<http://www.isna-mse.org/isna-mse/Snoezelen.html> (2015年8月20日参照)
- 44) I.の解題 214

A study on the thought of Snoezelen of the founders
—using the first book "Snoezelen, another world" of the founders
in the analysis target—

Hiroshi ANEZAKI Tokoha University